
神の選択と抗う絆

鷺崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の選択と抗う絆

【Z-コード】

Z7349Z

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

突如隼の前に現れた死神テトラは隼に願った。
世界を救つてほしい、と。

隼は強引にテトラに異世界に転移させられるが、隼はどうすれば世界を救えるのかを教えてもらつていない。

異世界という変わり果てた日常の中で隼は、出会いや別れ、取り留めないことでさえも通して過去のトラウマから抜け出し、変わろうとする。

〇〇 要領の悪い神（前書き）

序章
壊された日常

その日、全てが変わった。

「うお！…！」

学校から帰宅中の、荒神隼あらがみはやとは今日もいつも登下校に使っている道を自転車に乗つて一人走つていた。

高校を入学し、隼がこの道を使つようになつてから既に三ヶ月が経ち、この道ももう慣れた道と言つてもよい頃となつた。

しかし、慣れとは恐ろしいものだつた。

隼はいつも通り…いや、この道に慣れたせいもあるのか、注意力が散漫の状態で曲がり角を曲がつた。

そして突如、隼の目の前には一台の車が現れた。
車もブレーキを掛けているのだろうが、確実に当たるのが分かつた。

隼は反射的に強く目を閉じ、身体を強張らせた。

「……生きてる?」

それが、恐る恐る目を開けた隼の第一声であった。隼はいつの間にか寝転つている状態になっていた。

(車にひかれたけど、当たり所がよかつたとか?)

そう考えながら隼は普段通りの力の入れ方で、まず上半身を持ち上げてみた。

「……痛く、ない?」

なぜか隼は全く痛みを感じることなく上半身を持ち上げることができた。

「たしかに、俺は車にひかれた……よな?」

もはや、車にひかれたことすら半信半疑の状態であった。特に、目を閉じていたため、車と衝突した瞬間を見えていないことと、痛みが全く無いことが隼の頭を余計に混乱させていく。

「んーー…………ん? あれ? ここどこ? ?」

隼は今まで気付かなかつたのだが、ふと、辺りを眺めてみると、そこは明らかに先程までいた道路ではなかつた。

一番異なつていたことは、自分でも今までどうして気付かなかつたのかと思うのだが、隼は今、自身の身体ですらも見えない程の暗闇の中にいたのだった。

「……やつと目が覚めたな。待ちくたびれたぞ。あと5分、目が覚めるのが遅かつたら叩き起しすといだつたぞ」

不意に、頭上から声が聞こえた。

その声の主は口調こそ男のよつなといふもあるが、声色は若い女

性のものだった。

「……誰？」

当たり前の疑問が隼の口からこぼれた。そもそも隼はどひじひこにいるのか、自分でも分かつてない。

「そうだな……まあ、私のことはテトラとでも呼ぶとい。確認しておぐが、お前の名は荒神隼で間違いないな？」

「え、ええ、そうですけど……どうして俺の名前を？」

そもそもあなたはいつたい……？」

彼女は素早く隼の意を汲み取つて、こいつ話を続けた。

「おつと、呼び方なんてどうでもいいな。私が何者なのか、だな」「……そうです。あなたは何者なんですか？」

「私は……そうだな……お前達、人間に死神と呼ばれている存在、と言つところかな」

「……え？」

隼は、何を馬鹿なことを言つて言つてているんだ、と思ひもしたが、それ以上に、言い方こそ雑だが、テトラは本氣で言つているように感じられた。

「本氣で言つています？」

「ああ、本氣だとも」

テトラは一瞬たりとも間を空けることなく断言した。

「……」

「……」

「……証拠を見せてもらえませんか？」

「まあ、よいが……その前に堅つ苦しい話し方やめにしないか……昔のことを忘れるとは言わないが、もう少し器用にできないかのか？」

「 つ……」

テトラのその言葉によつて隼の頭の中に昔の記憶が蘇る。
そして、それが彼を覆いつぶやうとする。

恐怖によつて。

「すうー……はあー……」

隼は大きく深呼吸する」とこなつて、ビリビリか落ち着きを保てた。

「どうしてそのことを知つてゐるのかは、分かりませんが、まず、
証拠を見せてください」

「分かつた。分かつた。

……ふむ。さて、なにをすればお主に認めてもらえるものか……？」

「……」

しばしの沈黙。

そして、テトラが話しだす。

「……よし……」

ならばここで人の理を越えた力を見せれば、認めてもらえるか？」

「……分かりました。本当にそんなことができるのならば、認めましょう」

と呆れたように言つたものの、テトラのその自信に溢れた物言い
が隼を不安にさせる。

「では、いぐぢ……と、その前に隼、頭上をよく見ておけよ」

「わ、分かりました」

隼は、じぐり、と唾を飲み込む。

そして

頭上から一筋の雷が隼に向かつて、直撃してきた。

「 つ……」

当たり前だが、雷は光の速さを持つため、隼がその雷に気付いたのは直撃した後だった。

だが、それが自らに向かつて落ちてきたことは認識できた。

また隼の目は暗闇の中にはいるせいでも分かりにくいが、その眩しさによって焦点が微妙に合つていらない感覚があった。

「どうだい？ 信じてもらえたかな？」

呆然としている隼にテトラは尋ねた。

「……え？ ああ……いや、少し待つてください……！」

俺は雷に当たったのでは……？

隼は死んでいない。それどころか、痛みすら感じていなかった。だから、このような質問が出てきたのだ。

「ん？ ああ、今は雷ではないぞ。今はな……」

「才能」と叫びながら光だ

「……は？」

目が覚めてから、驚くばかりの隼だが、驚くといつことが無くなる気配は無かつた。

それ以上にもはや聞いたことが間違いだったのでは、と思つようになつてゐる。

「……分かりました。信じる」とこしましよう

「助かる」

隼は何とも言い難い思いがあつたのだが、一応はテトラのこと認めた。

いや、認めざるをえなかつた

「それで？ その死に、が……！」

隼はテトラを死神だと信じた後になつて、よつやく思つ出す。事故にあつたことを。

「そう、か…俺は死んだってことですか……」
「それなら完全に納得…とまではいかないが、わずかに納得できる
ところがある。」

「魂の回収といつものですか……」

「いや、違うが」

「えつ…！？」

「……」

テトラは当然の様に隼の発言を否定した。

隼は恥ずかしいことを眞面目に言つたからだろうか、顔に熱を感じ、赤くなっているのが分かった。

また、テトラが少し面白がっている気がした。

「な、なら、何が目的なんですか？」

その質問に対してもテトラは一拍おいて、眞剣な声で話しだす。

「…私がお前を呼んだ訳は…隼…お前に世界を救つてほしい…」

「……」

隼は、もはや何に対しても、びび驚べきなのか、自分でも分かっていない。

つい先程、意味の分からない力を見せつけられ、ありえない存在を認めさせられ、とうとう、隼自身に対しても理解できないことを求めてきた。

隼はもう何も言えなかつた。

「理解しがたいのは分かる。だが、もはや時は一刻を争うのだ」

私達にもお前にも。

「……え？ 僕にも？」

「そうだ。まず、私が言つている『世界』とはお前が思つてこるよ

うなものではない。」

隼は首を傾げた。

しかしテトラは仕方ない、と言つ風に話を続ける。

「お前に分かりやすく言つならば、救つてほしにのは全ての過去、現在、未来。そして全ての平行世界だ」

テトラは真面目な口調で話している。

隼も意味は分かった。

だが、ただそれだけであった。

「まず、お前にはある地に赴いてもらつ必要がある」

「……その前に聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「あの、俺は死んだはずではないのですか？」

隼はテトラの言つ『世界』は理解不能とし、一番気になつていたことを聞いた。

「ん？」

ああ、そうだな……そのことについても話さないとならぬいか
ふむ、どこから話すべきか……

隼の額から汗が流れる。緊張しているのだろう。

そして、テトラは再び口を開いた。

「よし、まずはどこに行つてもらうからかな。隼、お前には

異世界に転移してもらひ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「さて、その異世界とはな

「ちょっと待つてください……」

「まあ、黙つておれ。まずは私の話を全て聞け」

そのテトラの声は今までと異なり、相手に有無を言わさないもの

だった。

「……分かりました」

「よい。まず、その世界の『はじまり』の世界の言語で『はじまりの世界』と言ひとこりか。

そこはな、この世界で言ひ神話の世界なのだ。

いや、そもそもいくつかの神話はもともと、あちらの世界での実際の出来事だ。それが空間の歪みによつてこの世界に投影され、伝わつていつた。

そんな、お前達の世界ではありえない闘いの世界こそが『始まりの世界』というわけだ

（…………これはどう反応すればいいのだろうか？）

隼は黙つておくように言われたため、一人心の中でそつ思つていた。

「次にお前がそこに行かなければならぬ訳なのだが……
いや、その前にあちらの世界の現状を話そつか」

（何か深刻そうだな…）

テトラの声は最初に会話した時のものとは明らかに雰囲気が異なり、今は深刻そうに語つてゐる。

「今、あちらの人間は神々と戦争をしている……いや、違うな……そつ、神の干渉から逃れた、と言えば分かるか？」

（……分かりません…）

むしろ分かる人なんているのだろうか、とも思つてゐた。

「神はいる。その事を頭に入れて聞くがよい。

それで神つて存在は世界の管理をしている。基本的に人間からの干渉は出来ないのだが、あちらの世界の人間は神を人間界に引きずりおろして……殺した

(……それはどのくらい凄いことなんだ?)

「神はな、人間界だと本来の力の百分の一の力も出せない。人間も水中で走ることは難しいだろ?」

それと同じだ。神とて人間界では鬭いにくい。おまけに人間は神を強制召喚させる際に、さらに百分の一の力しか出せなくする結界を張つた。要は一万分の一の力も神は出せない。そして、殺された」テトラ自身も死「神」のはずなのだが、同じ「神」が死んだことを全く気にしていないかの様に話した。

(……人間もやるなあ……)

それに対しても隼は感心していたのだった。

「下級神が殺されるところまでは別に上位の神々は気にしていなかつたのだが、その後、人間はとうとう中級神まで殺してしまつた。そして上位の神々……上級神以上が人間を危険視し始めた。

だがな、神が自ら人間界に降りることは神々のシステム上問題があつた。だから神は『人間』を使うことにした

テトラは大事なこともスラリと、会話の流れで言つた。

「は?

それはどういうことですかっ!?

今まで我慢していたが、とうとう隼は声を出してしまつた。

しかし、テトラも特に気にする様子もなく話を続けた。

「他の世界の人間をあちらの世界に潜り込ませ、滅ぼさせるために、

だ。ただ、リスクも大きかつた。世界を渡ることの成功率は一パー
セント未満。

そして失敗したら魂は……消える……

テトラは重そうに語るもの、隼には魂という物がよく分からな
いため、テトラに尋ねた。

「魂が消えると、どうなるのですか？」

「……一つの魂が消えることで数万の人間が…消える…」

「??

待つてください。どうして魂一つで数万人もの人間が消えるので
すか！？」

「……世界つてものはな、神ですら幾つあるのか分からんんだよ。
例えば神の上の神、その上の神、と可能性の話をしたらきりがな
いことがある。

同様にそれが積み重なり、私達ですら知らない世界がある可能性
もある。そして魂は一人一つではない。世界を越えて繋がっている。
だからなんだ…」

「なら、どうして死神が俺に接触してきたんですか？」

一度話しだしたら止まらない。だが、テトラも怒ることはなかっ
た。

黙つていた意味はあつたのだろうか、とさえ思えた。

そして、今の隼の発言。気がつくと隼は何気なくテトラのことを
死神と言っていた。

隼はいつの間にか疑いが完全に消え、テトラを死神と認識したよ
うだった。

「うむ。それでなその魂の消滅のせいで世界のシステムが壊れ、世

界が滅んだ。それも既に数百は越えていた

「えつと、その神々のシステムとか世界のシステムつて

」

何なんですか？

そう聞こうとしたが、できなかつた。

テトラの声が隼の声を遮る。

なぜなら、

「なつ　　！　　！

くそつ！もう時間が無い。今すぐあちらに送るぞーー！」

急にテトラが焦りはじめたからだ。

「え？　えつ！？　それって魂が消え　　」

「大丈夫だ。そのための『才能』をお前に『与えて』おる。あちらの言語も頭の中に突っ込んである。だから頼むぞ。

世界を救つてくれ

「ちょっと待　　」

そして隼は意識を失つた。

……だだ、彼には意識を失う前に言いたいことが一つあつた。

だから、結局何をすればいいのですか？！？

そう…テトラは隼に「世界を救つてくれ」とは言つたものの、何

をどうすればよいか、ところにについては一切教えていなかつた
のだ。

01 異世界（前書き）

第一章
異世界突入編

「…………んつ……ん」

荒神隼は何か生暖かい物にべろり、と類を舐められた様な感覚と共に目を覚ました。

「ここは……？」

まだ意識がはつきりとしていない中、隼は周りの状況を確認しようと辺りを見渡した。

そこは見渡す限り木しかなかつた。密林地域とでも言つのだらうか。そんな場所だった。

そして隼の隣には彼が今まで見たこともない生物がいた。

（…「イツは犬か？ 犬なのか？

見たところ、ここは山か森の中なんだらつねび、この犬っぽいのは何だ？？）

そう考へてみると、隼はようやく思い出した。

テトラに異世界に送られたことを。

「ここが異世界、か…」

隼は感慨に浸る、というわけではない。むしろ本当に異世界なんか、どうか疑つていたくらいである。

隼は隣にいる生物の頭を撫でながら、呟く。

「はあ……結局俺は何をすればいいんだろうな……そもそも何で俺なんだ？ 才能の光つてなんなんだよ？

……いや、その前に必要なことは何も言われてないよな……」

そして、隼がぼんやりと呟いていたと、先程の生物が隼の足に類をすりつけてきた。

その生物の身体の大きさはまるでチワワの様に小さく、隼は何も知らないが、たぶん何かの子供だらうなと思った。
この大きさで大人という可能性もあるのだが…

その全身の太さはチワワより断然太く、体毛は真っ白な毛できれいに整っていた。

だが、顔つきが少しおかしい。

確かにかわいらしいのだが、犬とトカゲを合わせた様な顔つきをしている。

「きゅーー？」

その生物は、まだ鳴きながら隼の足に頬をすりつけ続けている。

（俺の顔を舐めたのも、コイツだらうな）

隼がのんびりと考えているが、よくよくその生物を見ると驚くべきモノがあった。

「これは羽根だよなあ？」この生物の背中にある鳥の羽根のような物を優しくつまんだ。

その羽根の大きさだけを見るならばさほど大きくはないが、身体の大きさと比較して考えると中々のものだった。

犬とトカゲを混ぜたような顔をし、四足歩行で白いふさふさの毛を持つている。

そして大きな羽根が生えている生物。まとめるといつことになる。

（……なんかドラゴンみたいだな…）

と冗談半分で思ったが、テトラがこの世界は隼が元いた世界の神

話ので出来たるやうな世界だと云つたことを思つ出した。

それなら、これもあつてゐるのか、とやうで考へるのを止めた。

「よこしょつと」

と、隼はその生物のことを無視して立ち上がつた。しかし、隼にはいじがどんなところなのか検討もつかない。

「まあ、適当に動き回つてみるか…」

まずは人を探せつと隼は思つてゐる。

そして街に行く。

野営などしたことない隼にとっては、山の中で夜に一人でいることは少し…いや、とても怖く、怯える姿が隼自身でも田に浮かぶ。

度胸がないな、と自虐すらしていた。

「ぴやあー！」

そう考へながら歩き始めると、この生物も隼の横に並ぶようにして、ついてきた。

「しつ、しつ。じつち来んなー！」

隼は手で追い払つよつた。ジエスチャーや見せながら叫つた。

「ひゅう？…」

「あー、絶対にわかつてないな。…まあ、当たり前か。

…なり、まずはコイツを引き離しておぐか

こんな小さな生物でも、どんな習性のある生物が分からぬのだ

から、いきなり襲い掛かつてくる可能性もある。

だから、隼は早くこの生物を引き離したかった。

そして、走つて逃げよつと隼が思つていた時だつた。

近くの草木が、ガサガサと音をたてた。
隼はその方向に素早く振り向いた。

「ふー」おおおお

そしてそこからは奇妙な生物が出てきた。
一瞬、人間かと思ったがまったく違つた。

その生物は一足歩行という点は人間と同じなのだが、他が大きく異なつていた。

皮膚は濃い緑色をしており、瞳の中は全て真っ黒、黒目しかない様だつた。耳は人間のそれよりもはるかに尖つていた。

身長は一メートル程であろうが、筋肉の付き方が激しかつた。
相撲取りよりも太い体つきなのにも関わらず、それが全て筋肉でできているように思える程の締まり具合だつた。

そして、その手の中には太い木でできた丸太の様なものが鷲掴みにされていた。

「ふー」おおおおー！

そいつはそう叫びながら隼を再度睨み付け、襲い掛かってきた。
「クソツ！ 僕が何をしたんだよー！」

涙目になりながら全力疾走する男がそこにいた。

「はあ、はあ、はあ」

地面が柔らかく走りにくかつたため、隼は十分以上走り続けて、ようやく先程の生物を撒けたようだつた。

「ひやああ！」

「なつ！」

隼はあまりに本氣で走っていたため、気付かなかつたが、その声の主である小さなドラゴンのような生物は隼の背中にくっついていた。

そしてようやく息が整つてきた頃、近くから音が聞こえてきた。その音はまるで滝が流れ落ちているような音であった。

「……水……水」

今しがたの逃走で、すでに隼の喉は渴ききつていた。

水に飢えてた隼は一目散に音がどこから聞こえるのかを聞き分け、足を進め始めた。

小さな生物も付いてこようとするのだが、隼には振りほどく余力はなかつた。

予想通り、歩いてすぐのところに滝があつた。

その滝の下にある湖らしき所には、底が透けて見えるほどの綺麗な水があつた。

隼は早速、勢い良く、大量に水を飲んだ。

水を飲み終えると、なぜか隼の身体は火照つてたまらなかつた。それは走つたから暑い、というわけではない。その熱はすでに引いている。

しかし身体の内側からは止まることなく、熱が生まれ続けている
ようだった。

（まさか、この水、飲んだらやばいのか！？）
そう思つてゐると、とたんに身体の熱は消え

本当にこのことについても「と勧めるべきだったのかもしれないが、そんな勧めはやめた。

顔を上げた隼にはそれ以上の驚きがあつたからである。

田の前には水浴びをしている女性がいた。無論、水浴びをしているのだから裸である。

その女性は隼に背を向けていたため、どのような顔つきをしているかは分からぬのだが、肌の色はとても白く、髪は灰色のものを腰まで真っ直ぐに伸ばしていた。

る女性だった。

「……って何してんだ、俺…これ、覗きだろ…」

た。

「ひやああーー！」

もちろん、先程のドラゴンの様な生物の声である。

「えつ！・！・！」

「あつ！」

隼も水浴びをしている女性もその鳴き声に反応してその生物の方に振り返った。

隼はすぐに、もう一度振り返り、その女性の方を見た。

その女性はとても美しかつた。

おそらく、隼との年齢の差はあまりないだひう。

そのため、顔も少しあどけなさが残つてゐる。だから、かわいいと言つ表現でも合つてゐるような氣はする。

しかし、やはり綺麗や美しいと言つ言葉が相応しく思えた。

大きな灰色の目。

そして先程言つたようにあどけなさが多少残つてゐるが、顔立ちは全体的に整つていた。

隼は見惚れていた。

(……ヤバッ)

二人の目が合つてしまつ。

それと同時に隼が我に帰つた。

(どうする、どうするよ？

いや、待て、落ち着け、俺。今この場面なら、逃げるべきか。いや、だめだ、だめだ。ここがどこかもわからないんだぞ。それに、わつきの危なつかしい生物もいるんだ。謝るしかないな)

以上のことと隼はわずか数秒で考えた。

そして素早く、深く頭を下げて言つた。

「す、すみません!!

本当に覗こうなんて気はなくて」

そのまま隼はチラリとその女性の方を見た。

勿論、下心などはなく、彼女がどんな反応をしてゐるのか気になつたからだ。

もしも、隼が思つてた以上に彼女が怒つていたのなら、さらに誠意を見せなければならぬ。また、彼女が恥ずかしがつてゐるような反応をしているのなら、断りを入れてから一旦この場から退いて少し離れた所で落ち着くのを待つた方が良いかも知れない、という考えがあつたからだ。

「えつ…！？　由…！？」　だが、彼女の反応は予想していないものだった。

彼女は何に対してなのは分からぬが、驚いていた。
何が白なんだろう、と隼が思い、この生物のことか、と納得した隼に彼女は話し掛けてきた。

「み、見た？？」

彼女は僅かに顔を赤らめて、可愛らしかつたのだが、隼は何かその奥に別の感情を感じてたまらなかつた。

（二）、これはどう答えるのが正解なんだ？
見てない…とは言えないし、ほんの少しだけ、って言つべきか？
？）

しかし隼は返答の方に思考が働き、一人苦悶していた。
そうしてみると彼女はもう一度聞いてきた。

「見たの、ですか…？」

それと同時に彼女は何とも言えない表情に変わつていた。
「そつか…見たんだね…」

暗い、暗い、悲しみの表情であり、諦めの…負の表情。
その表情を隼は、まるで見慣れたものに感じ取れていた。
もしかしたら自分と同じように境遇の人なのかも知れないと直感

した。

そして、彼女はその表情のまま小さく呟いた。

「…………私の髪を…………」

「そつち！？？」

隼は思わず頭を上げてしまった。

「あつ…………」

「あつ…………」

二人の視線が再びぶつかつた。

隼はなぜか、一度目の視線がぶつかるた時は焦つただけだったのだが、二度目になると顔が赤くなっていた。

それに対し、彼女は負の感情しか見受けられない表情のままだった。

隼はもう一度、素早く頭を下げた。

「『』、ごめん。あ、あの…………えつと…………」

気が動転して何を言つているのか分からぬ隼に彼女はもう一言、言葉を掛けた。

「いや、気にしなくていいから早くどこかに行つて」

その声はどこか、いや、一言一言が寂しく感じられた。

(…髪にコンプレックスもあるのか?)

もしそうなら、ここは何も言わずに立ち去つた方がよいのかもしない。下手なことを言えば余計に相手を傷つけることになるからだ。

隼はそつ思つている。

だけど

隼は立ち去る前に口を開いた。

どうしても彼女の顔が心の奥底に突き刺さるから。

「『』めんね。髪も見えたんだ」

出来る限りの優しい声で。

「だけど……」

隼は声を張り上げた。

そして再び優しい声で。

「綺麗な髪だつたよ」

そして、後ろを向いた。

本来なら隼はここまで頑張る必要がないのだが、彼女のあの悲しそうな顔が頭から離れなかつたのだ。

だから頑張つた。

そう　頑張つたのだ。

隼は昔の出来事のせいでの、人と会話をするときに砕けた話し方で話そうとする異様に緊張してしまつ。

対人恐怖症と言つわけではないが、緊張する。いや、そうでもない。緊張とも少し違う。

だが、話せない。

だから、優しく話すことは隼にとつてはとても大変で、苦しいことだった。

そして隼はそのまま去つとした。

だが、その時、

「待つて……」

後ろから声がした。

隼は耳を疑つた。

なぜ、俺を引き止めるのだ、と。

彼女は続けてこう言つた。

「もう一度……さつき言つたことをもう一度言つて

上手く聞き取れなかつたのだろうか、ただそれだけか、と納得した。

隼は深呼吸をしてからもう一度、優しく言つた。

「ごめん。髪も見えたけど、綺麗な髪だつたね」

「……本気で言つてる?」

「ん? ああ、本気だよ。真つ直ぐなめらかに伸びていて、それに灰色の髪つて見たことなかつたけど、とても綺麗だと思つよ」

彼女は数秒隼を見つめた。

そして、

「…………つ……！」

「えつと、俺なんかおかしいこと言つたかな?」

「…………少し」

「えつ?」

「少しそこで待つてて」

彼女は隼の予想の右斜めはるか上空を通り抜ける言葉を言い残して、近くの市場に向かつた。

服を着るためであつた。

その際に隼が見た彼女の目には涙が浮かんでいた気がしたのは気のせいだろう。

これは失敗したのかな。何も言わなかつた方がよかつたのか、と隼は不安になつてきた。

「ふうー」

隼は一息つく。

不安だらうが、少し疲れた。

だが、思つた程疲れていなかつたことと自分でも思いの外、スラスラと言葉が出てきたことは意外だつた。

(髪が綺麗だと思ったのは本心だつたからかな
そこで隼は気付いた。

(あれ? あの生物どこ行つた?

……まあ、いつか。巣にでも帰つたんだろ）

そして、待つこと十分と少々。

「ごめんなさい。お待たせしました」

ようやく彼女が姿を現した。

彼女は黒を基調とした半袖のカッターシャツと、こちらも同様に黒を基調とした短めのスカート。さらに赤いネクタイを着けていた。そのデザインこそ、隼は珍しいと思ったものの、雰囲気は隼の世界の制服その物だった。

「えっと、そうですね。まずは自己紹介を。私のことはリリーって呼んでください」

俺がリリーのことを眺めていると、彼女は恥ずかしそうに話しだした。

「俺は荒神隼と言います。よろしくお願いします、リリーさん」

やはり隼の口調は堅いものとなっていた。

「リリーでいいですよ」

「いえ、ですが…」

「『さん』禁止！」

「わ、分かりました。リリー」

隼がリリーの勢いに押されたような形で「リリー」と呼ぶこととなつた。

「ふふつ」

突然、リリーが笑いだした。

隼はまるで頭上にクエスチョンマークがあるかのよつて思える、

不思議そうな顔をしていた。

「あつー、『めんなさい』……」

リリーは我に返ったように謝る。

「別にいいですけど、どうしました？」

「えつとね、堅つ苦しいのはなしで、もつと樂にしない？」

「リリーがそうする分はかまいませんが、俺は……」「ダメ？」

リリーが上田遣いでお願いする。

隼はその仕草に、ドキリとしてしまつたが無理なことは無理であった。

「すみません。少し事情があつまつ……だけれどつか、そうなれる様にしておきます」

「そつか。まあ、いいや」

そして、そのまま会話が続くのだが、これからはリリーが一気に隼に質問を投げ掛けた。

「だけれどさつあと話し方変わつてるのはどうして？」

あと、アラガミハヤト？ なんて呼べばいい？」

「えつと、隼でいいです。それと先程の話し方は、その方がリリーも落ち着くかな、と思つて」

「ふうーん」

リリーは小悪魔的な笑みを浮かべて隼を見る。

そこで今度は隼がリリーにお願いをした。

「リリー。出会つたばかりなのに申し訳ないんだけど、少しお願ひがあります。いいでしょうか？」

「なに？」

「近くの街に連れて行つてほしいのです」

「……」

隼はこの世界の情報収集という意味で街に行きたかった。

だから頼んだのだが、なぜカリリーは一瞬顔を強張らせた様に見えた。

しかし、それは一瞬だった。

すぐに彼女の表情は元に戻っていた。

隼もそれが一瞬だつたため、あまり気に留めなかつた。

見間違ひだと思つた。

「それはいいけど、ハヤトはどうして自分で行けないの？」
リリーから、考えていなかつた質問が隼に問い合わせられた。

「……俺さ、かなりの田舎に暮らしてたんだよ。だから街に行きたかつたんだけど、行き方が分からなかつたからさ…」

よくもまあ、こんなに言葉を並ばしたな、と隼は自身で呆れていった。

「ふうーん。まあ、いつか

リリーは納得こそしていなかつたが、ありがたいことにそれ以上追求してこなかつた。

…そのはずなのだが、リリーは隼の顔を見続けていた。

「えつと…なんですか？」「そのね、あつた時から気になつてたんだけどね…」その一白髪はくはつつて地毛？「

「…白髪？

…誰が？」

「なに言つてるの？ 自分の髪でしょ？」

隼はその言葉の意味が分からなかつた。
それは、隼の髪は黒色であるから。

「リリー、鏡とか借ります？」

「ん、はい」

そう言つてリリーはポケットから小さな手鏡を取り出した。
そして隼はそれを受け取つた。

「 なつー? 」

そこにいたのは白髪の隼だつた。

目や耳にかかるないくらい長さや癖のない髪質は変わつていなかつた。

しかし、それだけではなかつた。

瞳の色も変わつていた。

翡翠色の目。

隼はそのまま他の身体の部位も見た。

しかし幸いと言つべきなのか、変わつっていたのは髪と瞳だけだつた。

一七 センチメートルを越えた程の身長に少し細めな体型、良くも悪くもない顔の作り、と他は同じだつた。

ただし顔は髪と瞳の色のせいで、今までとは異なつた印象を受ける。

黒髪と黒目の時よりほんの僅かだが、顔つきが良い様に思える。リリーが隼と出会つた直後に「白」がどうこう言つてこたのは、隼のことだった。

(転移の影響か?)

隼は一つの可能性を考えたが、しかしそれは答えが無い。
とあるまぬけな神のせいで。

だから隼は理由を求めるのではなく、事実を、結果のみを受け入れることにした。

リリーは、また嘘をついてしまつた。

「やうです。これは地毛です……」

「そつか。じゃあ、よつぱんじ écriture ができたいたんだやうな
「？？」

「どうしてですか？」

「だつて『白』髪だよ！？」

『白』なんだよ！？」

リリーが怒った様に声を張り上げた。

しかし隼には、リリーがどうしてこんなにも「白」を強調しているのかが分からぬ。

そもそも本当は今日、白髪になつたばかりなのだから。

「リリー。別に『白』だからって別段、変わることはないですよ
また嘘を言った。

「嘘つ！？」

どうせ私の髪も馬鹿にしてたんでしょう！？」

また髪だった。

リリーはなぜか髪に対しても異常に反応する。

だが、彼女の目からは涙が流れていった。

理由は分からぬ。何を言ってあげればいいのかも分からぬ。
だけど彼女の必死さは隼に伝わる。

「俺にはリリーが何にそんな必死なのか分かりません

「えつ！？」

「だから教えて下せー」

沈黙が流れる。

そして

「じゃあ、少し違うナビい？」

何を、とは聞かない。

言つたのは一言。

いいですよ、と。

「わ、私の髪を触つて、か、感想を言つて」

リリーは今は泣いるせいかあるのか、真つ赤な顔で、一度田の上
田遣い 今回はやるひと思つてやつたのではないが で言つた。

隼はリリーの田の前に近寄り、正面から彼女の髪に手を通そうと
する。

「…」

リリーはその瞬間、ビクリとし、田を強く閉じた。
そして隼は無言で彼女の、リリーの髪に手を通した。

リリーの髪質は細くて柔らかく、スラリと手から髪の毛が流れた。

「綺麗」

隼は無駄な言葉の一切を省き、本当に伝えなにことだけを言つた。
けれどリリーはその言葉を疑つてしまつ。

「嘘つ…？」

「い、え、綺麗です」

「灰色なんだよつ…！」

「綺麗な色ですか」

「…」

「…」

「…認めってくれるの？」

「ええ、綺麗です」

「…本当に？」

「本当にです」

「本当に本当に？」

「本当に本当にです」

「……」

そして、リリーが急に看場の方へ走りだした。

だが、隼は追わない。

なぜならリリーの顔には涙とともに笑顔があつたから。

そして、さらに十分後。

リリーが戻ってきた。

目が少し赤くなっているような気がするけど、それだけだ。

「ごめんね……」

「気にしなくていいですよ」

「ん、じゃあ早速街に送つてあげるよ」

戻ってきたリリーは元気だった。見でいて清々しかった。

「それはありがたいのですけど、どうやって?」

「そんなの決まっているでしょ」

魔具をつかうんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349z/>

神の選択と抗う絆

2011年12月25日13時47分発行